支援と受援⑭

# 津波が結んだチリとの友情

▲2013 年 5 月イースター島の人々の手で作られたモアイ像が南三陸町に贈られた。　写真提供　南三陸町観光協会

約 17,000 キロメートルの距離を越えて、南三陸町とチリは、友好関係を深めてきた。そのきっかけは、南三陸町で 41 名が犠牲となった 1960（昭和 35）年 5 月 24 日のチリ地震津波だった。この津波の記憶を未来に伝えようと、30 年後の 1990（平成 2）年に国鳥コンドルの碑がチリから贈られ、1991（平成 3）年には南三陸町がチリ人彫刻家に依頼して作ったイースター島のモアイが、志津川地区の松原公園に設置された。

震災直後の 2011（平成 23）年 4 月 28 日、チリ共和国パトリシオ・トーレス在日大使（当時）は自ら車を運転して南三陸町を訪問。志津川中学校に立ち寄って生徒や教職員にお菓子を贈り、同年 6 月 1 日にも再訪して生徒たちを励ました。また、2012（平成 24）年 3 月 30 日にはセバスティアン・ピニェラ大統領（当時）が町を訪れ、新たなモアイ像の寄贈を約束した。東日本大震災で壊滅した町に新たなモアイ像を贈ろうと、日智経済委員会チリ国内委員会はイースター島の長老会に協力を求めた。

イースター島の石に彫られた、高さ 3 m 重さ 2 t の巨大なモアイ像は、島外に出たことはない。2013（平成 25）年 5 月に南三陸町に寄贈されたモアイが、史上初めて島外に出た貴重なモアイ像である。

「モアイ」は、イースター島のラパ・ヌイ語で「未来に生きる」という意味だ。未来に生きる南三陸町の人々を、遠い未来まで勇気づけ、見守り続けることだろう。